ガーデン

グーグー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガーデン

【Ｎコード】
Ｎ６６２０Ｖ

【作者名】
グーグー

【あらすじ】
唐突に奪われた最愛の人…。
整理できない気持ち、そして何が起きたかも理解しえないまま、彼は最愛の女性の葬儀の後、雷が鳴り響く場所へ…
気がつくと、彼は不思議な世界へと。

プロローグ（前書き）

異世界トリップです。
主人公最強系ですが、メンタル最弱…いろいろとムラがある奴です！
まぁ、どんな奴なのか、みなさんと一緒に成長できるよう頑張らせます↑（え

プロローグ

神様…もし、いるなら…どうか僕を…

彼の名は蒼馬与一。
小さな指輪を握りしめ…雷鳴が轟く中、彼は意識を失った。

プロローグ

あれは1ヶ月前…幼馴染みの悠紀と式を挙げた。
僕らは幼馴染み、そして最高のパートナーだ。

だが…それは唐突に、そして理不尽に…何もかも失い、奪われた。

あの日、仕事から帰ってきた僕は妻の悠紀に電池がないからと近くのコンビニへイヤイヤながらも向かわされた。
なに、いつものこと…怒ったように少しハニカムような顔、だいたいのわがままは彼なら聞いてくれる、そんな尻に敷かれた生活も悪くないか…そんなことを電池と一緒に買ってきたアイスをぶら下げながら帰宅すると、そこには頭から血を流して、悠紀は倒れていた。
一瞬…何が起きたのかわからない、この光景はなんなんだろうか。

二週間後、悠紀は亡くなった。

プロローグ2

最愛の妻の葬儀が終わった。

友人達は僕に慰め、そして殺された妻には哀しみを…姿なき犯人には怒り、憎しみを声をあらげている。

僕の妻は奪われた…

彼女へ渡した指輪を見つめていると、あの喜んでいた妻の顔が蘇る。

時刻はすでに深夜を回る。

外では夏場特有の渇いた空気に促されてか、雷鳴が響いていた。

「このまま…僕も…」

彼は雷鳴の雨の中へ走りだし、そして青い光が照らし出すと同時にこの世界から姿を消した。

『神様…もしいるのであれば、僕の罪はなんだったんでしょうか？』

第一話

無音…字のごとく音がないと言うべきだろうか、その空間の静けさが逆に耳にさわる。
目の前にはソファやぬいぐるみ、テーブル、子供が遊ぶ木馬やおもちゃが無造作に置いてある。
壁というものはなく、白い空間…空間なのだろうか、しきりや壁がないので平衡感覚すら信用できない。

「…ここは…」

与一は妻にあげた蝶をあしらったシルバーの指輪を握りしめたまま辺りを見回す。
だが、無音のその世界は何も動かない。

…ィ…キィ…

と、目の前のおもちゃの木馬が急に揺れだした。

「…れ…なんと…人か！」

視線を奪われていた木馬から目をはずすと、そこには木の仮面だろうか、大きな…とても大きな仮面をつけた人がこちらをむいていた。

「なっ…」

「なっ？いや、わしは『なっ』ではない」

「えっ…」

「ふむ…わしは『えっ』ではない」

声の感じから察するに老体だろうか、だが様子がおかしい。

「…あなたは誰ですか？」

与一は少し間を起きながら声をかけた。

「『あなたは誰ですか？』ふむ、わしは誰でもない、名前というのは魂を縛る、わしは縛られと～ないからの」

老体はそう言うなり答えにならない答えをだし、そのままキョロキョロと辺りを見回しだした。

「ふむ…君はなんともまぁ…ふむ、おかしな運命をもっておる…なぜここへこれた？」

老体はアゴヒゲの部分だろうか、口のモニュメントの部分をしきりに触り、与一を舐め回すように顔を上下へ動かしていた。

「…僕は…妻が殺されて…葬儀をあげ…妻の後を追おうと…」

与一はそれだけ言うと、少し口元を緩めた。

「どうかしてたんです…雷に打たれたらいい、そんなことを思って外に出て…気がついたらここに…ここはあの世ですかね」

与一は落胆したような…それでいて安心したような表情のまま老体を見つめた。

「ふむ…ふむ…あぁ、かみなり、雷…正確には神が鳴る、神鳴りじゃ、人の子よ」

「神鳴り？」

「ふむ、神鳴りじゃ…なるほどなるほど…あい、わかった」

老体は右手を掲げたと思うやいなや、その手には古めかしい茶色の大きな本が現れる、が、すぐに開きだしパタパタとページがめくれ、ある場所で止まった。

「ふむ…ふむむむ…運命を別つ時がきた。神は君を選ばれたようだ、なるほどなるほど…」

「あ、あの、さっきからなんなんですか？神鳴り？運命？ここがあの世であれば…会わせてください、悠紀に…妻に合わせてください！」

与一は握りしめていた手をより強く握り、老体の前へと小走りで歩きだす。

「ふむ、待たれよ…待たれよ待たれよ…」

老体は左手で制止すると、与一へ、見開いた本を差し出した。

「ここの名はガーデン、名に縛られたこの場所は、運命を司る聖域…ふむ、ふむふむ…汝、名に縛られし蒼馬与一、神鳴りに選ばれた人間よ…旅に出るがいい、運命を別つ、旅に出るがよい」

与一はあっけにとられたまま、口が閉まらずに呆けている。

「運命を別つ？神鳴り？え…なんなんですか？」

「ふむ…ふむむむ…神鳴りとは、神に選ばれし人間、その人間は運命を別つ旅にでる可能性を与えられし者…運命を変えられる、ふむ…神の戯れじゃ」

与一はその非現実の世界、与えられた言葉の意味…鼓動が激しくなるのが自分でもわかっていた。

「…運命を変えられるのですか？」

「ふむ…変えられるかもしれんの…」

老体は無言のまま与一を見つめている。

「僕は…運命を変えたい…こんなのイヤだ…神の戯れや幻でもいい…僕は悠紀が死ぬ運命なんてイヤだ…」

変えたい…こんな運命…イヤだ…

イ　ヤ　だ！

「ふむ…これよりこの世界の名はガーデン…運命を別つ者、名に縛られし蒼馬与一…汝に神鳴りの祝福を…！」

と、老体の仮面が上下逆さまになる…柔らかい表情から一変、きびしくも険しい表情へと変わる…持っていた古書は蒼く燃え上がり巨

大な光をおびだした。

「汝、神鳴りに選ばれし者、名に縛られし蒼馬与一…世界に光あれ！」

そう老体が叫ぶと、蒼白い炎は膨れだし、膨張した炎は光とともに与一を包みこんだ。

そして…

その世界…

『ガーデン』は生まれた。

名に縛られし世界ガーデン…物語はそこより千年後に動き出す。

第一話（後書き）

神鳴り

ガーデン

老体

古書

と、まぁ、いろいろ出てきましたが、のちのち解明するはずです（笑）

さて、物語はガーデンが生まれてから千年後…

次からはみっちり長く書くつもりです。

プロローグ編は…あえて短くしました（笑）

？←マークをつけたまま読んだほうがおもしろいかもと（笑）

どうぞ『ガーデン』をよろしくお願いします（笑）

第二話

ここは…どこ…

与一が目を開けると、そこは緑がうっそうとしていた森の中。

「た、確か…変な場所で…運命…神鳴り…あ、変なおじいさん！」

慌てて辺りを見回すが、見えるものは大きく太い木々、聞こえる音は鳥のさえずり…

「…どうなってんだ…」

手を握るとチクッとした痛みが走る。

「悠紀の指輪…夢じゃないんだ…運命を変えれたのか…」

与一は男でも細いであろう指に指輪をはめながら立ち上がると、また辺りを見回した。

「とりあえず…この森から出て帰らなきゃ…」

腕時計を見ると時刻は二時を少し過ぎた頃。

与一は少し歩き、轍を見つけてそのままとぼとぼと歩いている。

〜？？？〜

「まだか！」

馬を走らせながら背中に槍をしょいこんでいる大男が叫ぶ。

「エルグ、落ち着いて！」

エルグと呼ばれた大男は舌打ちをすると、持っていた鞭で馬のような生き物を叩き出した。

「それ！もっと早くだ！」

「だーかーらー、落ち着いて行動しなさいよ！」

「うるさい！こうしてる間にも、盗賊に襲われてる村が何件あると思ってんだセフィ！」

「それは…」

「盗賊の目撃情報だと、やつらリムル村を襲うつもりだ…まだ間に合う…」

セフィは小さくうなずくと、鞭を軽く何回か入れていた。

〜与一〜

「なんだこれ…」

舗装されていない轍を歩いていると、ツンとくるイヤな匂いが辺りをしめている。
と、黒い煙が立ち上っているのに気付いた。

「火事か…」

与一は煙の方角へ走りだすと、妙に体が軽く、走るスピードに視界が追いつかないことに気付いた。
ものの三分ぐらいだろうか…遥か遠くの出来事と思っていたのもつかの間、眼下には黒煙が上る村が見下ろせる。

「火事だ…ん…様子が…」

防衛本能なのか、与一は屈むと注意して村を見下ろしていた。

「襲われてる…襲われてる?え…なに、これ…」

眼下には刃物を持った男達が他の人間達を切りつけていた…撮影じゃない、あまりにもリアルだ…

「な…なんなんだこれ！」

与一は腰がひけたまま視界をずらすことができない…。
襲われている…男が切りつけられている…女も…

途端に強い吐き気がした…殺されてる、みんな…殺されてる…

悠紀…

「やめろー！」

与一は今まで出したことのないような大声を発し、眼下を睨む。

～盗賊～

「なんだありゃ…」

盗賊の一人が丘の上でこちらを見据えている男を捉えた。

「ふはっ、やめろだとよ！」

盗賊は傍で女を追い回している仲間にニヤニヤしながら顎で男をさした。

「どうせ村の奴だろ…皆殺しだ」

盗賊はそういうなり刃物を大地にさすと、体から赤いオーラを出して何かを叫ぶ。

「燃やせ！」

男が叫ぶと、刃物の柄から赤い球体が与一めがけて飛んできた。

〜与一〜

「な、なんだ！」

与一は目の前に飛んでくる赤い球体に目を奪われた。

「う…うわっ」

両手で顔を守るそぶりをするも、球体は与一が立つ丘へ当たる…と、途端に大地はえぐれ、与一が踏みしめていた大地は音を立てて崩れだす。

非現実…与一は崖の下へ落ちるまま、意識はブラックアウトした。

〜盗賊〜

与一が崖下へ落ちてから数分、盗賊らは崖下へ落下し、意識がない与一を村までひっぱってきた。

「やぁやぁ、村人諸君…シャバ代が払えない貴様らの変わり、こいつが償ってくれるそうだ」

広場へ集められた生き残った村人達の前に連れ出された与一、その顔には両刃の刃物がペチペチと当てられていた。

「こいつを処刑する…なーに…俺たちも食いぶちがなくなるのは困るからな…へへ…今回はこいつ一人の命で終わらそう…だが、優しい俺たちはこいつを殺さない…殺るのは同じ村人のお前らだ」

盗賊は卑しい顔を村人へ向けた。

〜？？？〜

…このクズ共、この気を失っている男を村人だと思っている…。

「ユウリ…ダメ…」

隣でユウリと呼ばれる女性のスソを掴み、必死に制止しようとしてある老婆。

「おばあちゃん…あいつら見張りに外へ行った…今なら二人しかいない…私なら…」

「やめておくれ！あいつらに逆らってはダメ…」

「でも…剣が手に入れば…」

小声で話していたつもらだったが、盗賊の耳に二人の声は雑音とともに聞こえていた。

「おい！女とババア…こっちにこい」

びくっとした老婆の手をとり、ユウリは祖母と共に前へ歩く。

「女、お前が殺れ…二度と反乱なんかしないよう、こいつを殺して誓え…」

男がユウリに剣を渡す…ユウリは柄を握るなり目を光らせた。

「だが！」

盗賊の大声に戸惑うと、次には信じたくない光景が視界に入った。

「もし…できなければ、このババアは俺が殺す」

剣を渡してきた男とは別の男が祖母のクビへ両刃の剣を当てていた。

どうしよう…

ユウリは柄を握りしめたまま祖母と意識がない男を交互に見つめる。

こいつを殺さなかったらおばあちゃんは…でも、知らない人とはいえ…殺してしまったら私もこいつらと…

嫌な汗が吹き出してきた。

「早く俺たちに忠誠を誓え…殺すやり方がわからなければ…見せてやろうか？」

男はそう言うなり、祖母に当てた剣をゆっくりとひく。

「やめて！」

「なら、早く殺れ！」

盗賊の男は声を張り上げ、卑しい笑みを浮かべる。

心臓の鼓動が聞こえる…柄を持つ手は汗でぬめりとしていた。

…ごめんなさい…

少女の腕があがり、村人達は声をあげ…盗賊達はその瞬間を心待ちにしていた。

「ん…ん…」

…目が覚めた…

少女は降り下ろした剣を見ることができず、ごめんなさいと何度も繰り返しながら、その時を迎えた。

～与一～

「起きろ…おい！」
怒鳴りつけられるように目を覚ますと、そこは夢の中だろいか…覚めたのに変だ…
「よぉ、主…さっそく気を失うとは…それでも神鳴りに選ばれたシーカーなのか？運命の探索者さん…」

与一は声のするほうへ視線をむけると…
「うわっ…でかい！」
と、目の前には大きな足だろうか、見上げるまで柱かと思うほど…。
「き、君は？」
与一は目の前の…なんだろか…まず初めに思い出すのは伝説などで浮かべるダイダラボッチ…に、似ている。
口があるのだろうか、確認もできない。
だが、声だけは頭の中へ流れてくる。
その巨大な何かは身体中に紋様を浮かべ淡い光を放っていた。
「主、私はあなたの魔力そのもの…主の体に宿りし精霊…縛られし名はオーカ」
「オーカ？待ってよ、魔力？え？」

与一は後退りながらも、その巨大な何かを見ようと、顔を上げた。

「ここはあなたの世界…ガーデン。あなたを構成している喜怒哀楽、愛、憎しみが作りあげた世界…神鳴りに選ばれし人間…」

「が…デン…」

と、与一の頭に渦のように記憶が甦る…ガーデン、神鳴り、運命を変える…旅…

「主よ、ここはあなたがいた世界ではない…すでに運命を変えるべき世界は創造され…主、あなたは旅立つ…どうだい、気分は？」

敬語の中に見下すような言葉…

「オーカ…僕は…」

「なに、主よ…全て我に任せよ…心配するな…我に預けよ…」

与一はその言葉通り、オーカと溶け込むような感覚に襲われた。

「主よ…思うままに…」

‘ガキッ’

金属音にも似た音が響く。
とっさに目を開けたユウリは眼前に広がる光景に目を奪われた…。
黒髪、黒目の青年は右腕で剣を止めている。
「うそ…なんで…」
青年の腕と剣の間には黒いモヤがかかっていた。
盗賊も村人もユウリも何が起きたのか理解できない。
と…
「…おいおい、目覚めたらいきなりこれかよ…まったくついてねぇ…」
青年はユウリに目を向ける、青年の黒目はしだいに赤みをおびてきた。
「ひっ！」
ユウリは剣を手放し、その場へへたりこんだ。
青年はユウリを見下すと、左手を横へあげる。
「な…なんだてめぇ！このババアの…」
盗賊が叫ぶやいなや、その頭部は空中を待った。

よく見ると青年の左手を纏うように出ている黒いモヤが大きな腕を型どっている。

「な…てめえ、何の魔法を！」

もう一人の盗賊はユウリが手放した剣をとるなり、青年へ切りかかる。

が、その刃は青年が纏う黒いモヤで止められていた。

「俺は魔法は使えない、これは魔力…性質変化、形態変化はできるがね」

青年はそういうなり左手に魔力を集め球体を作る。

「…こんな風に…」

青年の口元が笑ったように見えた。

球体から飛び出した鋭利なトゲは盗賊の頭を貫通し…その場で息たえた。

「さぁ、この世界…初めまして…そして、終わりが始まる…ね…お嬢さん」

青年は腰を抜かしているユウリに微笑み、再度気を失った。

後方の村の入口では男の叫び声がし…そして辺りは静寂につつまれた。

第二話（後書き）

オーカ
ユウリ
エルグ
セフィ

オーカはどうなんだろ…とまぁ、与一の運命は動き出しました。

どうなることやら（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6620v/

ガーデン

2011年10月6日00時16分発行